

## 日本病理学会中国四国支部「第20回病理学夏の学校」開催報告

第20回病理学夏の学校 世話人 増本 純也  
愛媛大学 医学部 解析病理学講座

令和になって初めてとなる第20回日本病理学会中国四国支部主催「病理学夏の学校」を、令和元年8月17日（土）・18日（日）の2日間、奥道後温泉ホテル「壺湯の守」にてお世話させていただきました。参加者は中国四国支部の大学や病院のほか、関東や近畿などから学部学生32名と大学院生・初期研修医13名のほか、講師・教員など25名の計70名です。参加者の皆様より暖かい心尽くしを頂戴致しましたことも併せて御礼申し上げます。

今回の夏の学校は「病理学の原点に触れる」をテーマに掲げ、病理学総論をいまいちど見つめ直し、これまでに病理学がいかに疾患の病態メカニズムの解明に寄与してきたかを再考する機会にすることを目的としました。

そこで、課題とそれを解説していただく講師に兵庫医科大学教授の廣田誠一先生、信州大学医学部教授の中山淳先生、順天堂大学医学部名誉教授の樋野興夫先生をお招きしました。課題は、病理医である講師の先生方が中心となって病態解明に寄与し、*Science* 誌などの超一流雑誌に掲載されるまでに至った経過を追体験するもので、その経過と結論を発表していただきます。まずは、病理組織標本の染色像に関する問題意識を共有することからはじめました。

課題1は廣田先生らの論文『Gain-of-function mutations of c-kit in human gastrointestinal stromal tumors. *Science* 279(5350):577-580, 1998』から引用しました。課題2は中山先生らの論文『Natural antibiotic function of a human gastric mucin against *Helicobacter pylori* infection. *Science* 305(5686):1003-1006, 2004』から引用しました。図や表などと基礎的な実験手法を解説したガイドをUSBフラッシュメモリーに保存して配布しました。また、それぞれの論文掲載前の臨床と病理に関する問題意識などの背景をレジュメで配布し、その問題を解決するための実験デザインと、その実験で得られると予想される結果などを課題として与えて、学生主体のTeam-Based Learning (TBL-チュートリアル)の形で進めていくプログラムを準備しました。チューターには、実際に研究を進行中の大学院生や、日々の病理診断において問題意識を持ち続けている研修医の先生に介入していただきました。実際の症例のプレパラートを講師の先生からご提供いただいて、ディスカッション顕微鏡とバーチャルスライドシステムを用意して検鏡できるよう準備しました。この準備には浜松ホトニクス株式会社様と株式会社猪原商会様にご支援をいただきました。改めまして感謝申し上げます。

1日目の前半3時間をグループディスカッションとし、後半2時間を課題のプレゼンテーションとしました。作業分量がやや多いことと、剖検症例などでのディスカッションとは異なり、問題意識を見える化して自分の手で解決していくという課題に当初戸惑いが見られましたが、学生諸君は短時間で適応されてい

った様子でした。

1 日目夜の食事の時間を利用して、ご多忙の行事の間隙を縫って駆けつけてくださった樋野先生に『悠々とした病理学』のご講演をいただきました。同時に各大学の PR を実演や動画などを用いて紹介していただきました。今回も 2 年前に夏の学校ポスターに映り込んでしまっていた「オマエも病理医ニシテヤロウカ」と書かれた“謎のガウン男”が登場しました。夕食後は離れの昭和レトロな宴会座敷にタイムスリップし、夜咄に興じました。

2 日目は、廣田先生から、課題 1 に対するご講評と同時に、当時日常の病理診断で平滑筋由来の腫瘍とされていた GIST がカハールの介在細胞に由来することや c-kit の活性化が原因となることの発見の歴史と、最近の病理診断や患者会との交流などをご講演いただきました。中山先生からは、課題 2 に対するご講評と同時に、*H.pylori* が腺粘液内に存在しないことに日常の病理診断業務で気づき、その謎を解き明かすまでの探求心の大切さなどについてご講演いただきました。いずれも通常のご講演ではお聞きすることのできない内容で、実際の生のライブでのご本人による Science としての病理学に触れることができ、学生や大学院生や研修医のみならず私たち教員にも大変な刺激になりました。

最後に、増本から、山極勝三郎の著した『病理学総論講義』を題材に細胞傷害と細胞傷害因子および、それらの細胞傷害因子のセンサーとしてのインフラマソームとそれらを分子標的とした創薬研究を超速で講義させていただきました。

表彰式では個人賞は敢えて設けず、教員の先生方からの評点を基に全グループを個別表彰させていただきました。課題および論文や資料、当日の集合写真やスナップを総括ファイルに一括し、ご参加いただいた施設宛に郵送しております。今後の病理学夏の学校開催にあたり、参考にさせていただけたら幸いです。末筆ながら、準備段階での諸手続き等につきご指導下さった森谷支部長、当日の急なチューター・座長の御依頼に、嫌な顔ひとつ見せずご快諾くださいましたの先生方、そしてご参加いただいた全ての皆様、そして、第 20 回病理学夏の学校に賛同してご支援を賜りました愛媛県医師会様、化研テクノ株式会社様、浜松ホトニクス株式会社様、株式会社猪原商会様にこの場をお借りして厚く御礼申し上げます。

### 【プログラム】

1 日目 8 月 17 日(土)

11:30-12:30 受付 奥道後壺湯の守 錦晴の間

12:45-13:00 開会・オリエンテーション

13:00-15:00 課題・ディスカッション

15:00-16:00 チェックイン、発表スライド作成

16:00-18:00 発表・討論・全体写真撮影

18:00-19:00 温泉入浴/自由時間

19:00- 夕食 錦晴の間

19:30-20:00 「悠々とした病理学」順天堂大学名誉教授 樋野 興夫先生

20:00-21:00 大学紹介

21:00-未明 交流会/温泉入浴 牡丹の間

2日目 8月18日(日)

7:00- 8:30 朝食および自由時間 桜の間

8:30- 錦晴の間

8:30- 9:30 課題解説・ご講演 信州大学教授 中山 淳先生

9:40-10:40 課題解説・ご講演 兵庫医科大学教授 廣田 誠一先生

10:40-11:10 病理学総論講義 愛媛大学解析病理学教授 増本 純也

11:10-11:40 表彰式・次開催校ご挨拶・閉会の挨拶

# 日本病理学会中国四国支部

## 第20回 病理学夏の学校 in 松山 アンケート結果

下記項目について最も近いものを選択していただき、自由にご感想やご意見をいただきました。

### 1. 今回の課題

満足 22人 やや満足 16人 どちらともいえない 2人 やや不満 4人 不満 2人 / 46人

#### (学生コメント)

- ・ とても勉強になった。
- ・ 課題は難しかったが斬新で頭を使って考えるのが非常に楽しかった。
- ・ 研究者がどのような流れで研究を進めたかを考える良い経験になった。
- ・ 2日目の講義がとても興味深く、知的好奇心が大いに刺激された。関連論文等を読んで理解を深めたい。
- ・ 課題がエキサイティングだった。関連した2日目の講演もとても面白く勉強になり、今年の夏の学校は非常に満足度が高かった。
- ・ 課題自体はとても難しく話し合いについていくので精一杯だったが、とても良い勉強になった。課題でしっかり思考したので翌朝の解説の理解がより深いものになった。
- ・ 病理学は術中迅速診断を見かけることが多いが、今回のように昔の人の思考に沿ってロジックを組み立てていく病理学もあることを知り、新たな一面を見れてよかった。
- ・ テーマの難易度が高すぎる。次回からの参加者が減らないか心配だ。問題の主旨が分かりにくく、短い時間でスライドをまとめるのはできる人に頼らざるを得ず全員参加のディスカッションもままならなかった。
- ・ 内容が入門者、初学者お断りという内容に思えた。低学年の参加者にも何か持って帰れる内容にしたほうが良いと思う。これから病理学に興味を持とうとする人を難解な解説で門前払いすることは避けたほうが良いと思う。

#### (研修医、大学院生、教員コメント)

- ・ 斬新で楽しかった。
- ・ 課題が難しかった。
- ・ テーマが難しすぎと思った。
- ・ 病理学の原点に立ち戻ることができた。
- ・ 病理研究に興味を持ってもらう課題がどのようなものか考えてみたい。
- ・ 研究の考え方にフォーカスが当てられ、これまでにないユニークな企画で楽しめた。
- ・ 課題設定に腐心されたと思う。学生の思考プロセスも垣間見え、勉強になり楽しめた。
- ・ 課題はとても難しかったが、学生が頑張っけてまとめている様子を見てこちらも頑張らないといけないという気持ちになった。

- ・ 当初課題は少し難しいかと思ったが、病理を出発点とする研究を学生に追体験してもらおうという今回の試みは新しく、普段の講義ではなかなか提供できない貴重な教育の機会になったと思う。
- ・ 課題をまず学生自らの力で考えさせ、次に実際に仕事をされたご本人から時系列で何をどう考えてどのように問題を解決してきたかをお聞きするという流れは研究の面白さをリアルに伝えるとても良い機会になったと思う。

## 2. 進行

満足 36 人 やや満足 8 人 どちらともいえない 2 人 未回答 1 人 /46 人

### (学生コメント)

- ・ 2~3 時間でまとめるならばもう少し課題の量が少なくてもよかったかもしれない。
- ・ 課題に取り組む時間、発表準備の時間をもっとあればより議論を深められたと思う。

### (研修医、大学院生、教員コメント)

- ・ 課題の時間が短い。
- ・ 全体的にはスケジュールに余裕がありよかった。
- ・ チューター的にどこまで助けていいか指示をもらいたかった。
- ・ 学生を中心に進めるのならもう少し時間をとればまとめやすいと思う。
- ・ テーマ設定から講演への流れ、初日に学生発表を終わらせるという日程が良かった。
- ・ 1 日目でグループワークを終えるという今回の構成は学生さんも心置きなく夜の部を楽しめてよかったと思う。
- ・ 松山 12:10 着の特急に合わせて 13:00 受付にすればより都合がよいと思った。

## 3. 懇親会

満足 31 人 やや満足 13 人 不満 1 人 未回答 1 人 /46 人

### (学生コメント)

- ・ 懇親会でたくさんの先生方とお話しできてよかった。また参加したい。

### (研修医、大学院生、教員コメント)

- ・ 他院、他学のお話がたくさん聞けて非常に有意義な時間が過ごせた。

## 4. 愛媛大学スタッフの対応

満足 40 人 やや満足 4 人 どちらともいえない 1 人 未回答 1 人 /46 人

### (研修医、大学院生、教員コメント)

- ・ 増本先生の袴姿 (『坊ちゃん』の衣装) が素敵だった。

## 5. 会場・設備

満足 32 人 やや満足 9 人 どちらともいえない 4 人 未回答 1 人 /46 人

**(学生コメント)**

- 景色、温泉ともに満喫できた。
- 道後温泉はやはり最高だった。
- 宿も温泉も食事もすばらしく心地よく過ごせた。
- 奥道後に行く楽しさと山中の静けさを存分に味わえてとてもいい会場だった。

**(研修医、大学院生、教員コメント)**

- 風呂がよかった。
- 会場が寒かった。
- 二次会会場が過ごしやすかった。

**6. 移動・交通の便**

満足 20 人 やや満足 14 人 どちらともいえない 10 人 やや不満 1 人 未回答 1 人 /46 人

**7. 事前案内の時期・内容**

満足 30 人 やや満足 11 人 どちらともいえない 4 人 未回答 1 人/46 人

**(研修医、大学院生、教員コメント)**

- 開催時期は西医体と被らない日程が良い。

**8. 今回の夏の学校のご感想やご意見、今後夏の学校に期待することなどご自由にお書きください。**

**(学生コメント)**

- 初めての参加だったが、他の参加者の皆さんと交流できた。参加してよかった。
- 4 回目の参加だったが、一番の満足度だった。
- 研修医になっても可能であればまた来たい。
- 病理組織を見て診断を考えるのもやってみたい。
- 課題を通して学生や研修医の方と交流し様々なことを学ぶことができた。
- 小児の自己免疫疾患、自己炎症性疾患のメカニズムとその差異が興味深かった。

**(研修医、大学院生、教員コメント)**

- 初期研修医と後期研修医は分けたほうが良い。



集合写真



グループワーク



課題発表



大学紹介



夕食



## 第20回病理学夏の学校

集合写真NG



大学紹介



2次会



樋野先生 悠々とした病理学



中山先生ご講評



中山先生ご講評



表彰式